

自立性を養う褒め方・叱り方

鈴木 臨太郎 高畑 大樹 田西 風太 寺村 優輝

杏林大学医学部1年「地域と大学」G3グループ

【目的】

時代の流れとともに、子供に対する教育の方向性も変わりつつある。成長の過程で他者の支援がなくとも自ら考え行動できる能力をどのように養うことができるのだろうか。

学童での子供たちとの交流において最も難しく感じたことは子供を叱ったり、褒めたりすることであった。しかし子供を教育するうえで「叱る・褒める」ことは必須である。子供たちの「自立性」を伸ばすうえで「叱る・褒める」ことは重要である。そこで「叱る・褒める」ときの気を付けるべきことや、教育現場での子供たちの特性を調べた。

【方法】

一つ目の方法として、日々の活動の中で、子供たちを指導する際に難しいと思ったことをリストアップし、その解決策や指導のコツを学童の先生に聞いた。学童の先生に直接アドバイスをいただき「叱る・褒める」ときのポイントを学んだ。

二つ目の方法として、医学・心理学・教育学の書籍や論文を通して子供の特性や教育方法を調べた。子供の問題行動について理解しそれらに対しどのような対処法があるのか、指導者としてどのような態度で接すればよいのかを調べた。

【結果及び考察】

子供の問題行動には大きく二種類に分けられ、一つは人や物に対し危害を与える行動である。もう一つは、危険は伴わないが不適切な行動である。一般的には、後者が子供に最も多くみられる行動である。また、実習を通して、子供たちはそうした行動を繰り返すということに気づいた。これは脳のシナプスの伝達を訓練するために行われる。また、障がいをもつ子供や虐待児にみられる「試し行動」が

ある。これは彼らが自分のことをどの程度受け入れてくれるかを探るためにわざと他者を困らせるような行動のことである。このように、子供たちの行動パターンの背景にはさまざまな理由があるということが明らかになった。

そのような子供たちの問題行動に対峙したとき我々は子供たちを正しく「叱る」必要がある。「叱る」という言葉は相手に良い方法を教示することである。その際に、子供たちの成長を促すという目的に沿わなければならない¹⁾。叱るときに大事なものは、子供の立場に立って話を前向きに受け入れてもらうための「共感力」。また、子供の行動に対し即座に注意ができる「瞬発力」、そして最も大事なのが子供に確実に要件を伝えられる「伝達力」である。これらのほかに、子供に望ましい行動を導くよう促し、声のトーンを子供に合わせる、子供のすべきことの一つ一つを小さな「目標」と捉えさせることなどが重要である。

一方、「褒める」ことは難しく、練習・訓練が必要だ。なぜなら、日本語には「褒める」ための語彙が著しく少ないからだ。そのため、「褒める」ことは一種の技術であり、「叱る」ことよりもその効果は出にくい。だが、心理学に「初頭効果」とよばれる現象がある。これは、一番初めの印象が全体の印象を決定する確率が高くなるというものである。これを利用すれば、褒めた後に叱ると最もその効果が出やすくなる。「褒める」ときは、増やしたい行動を具体的かつすぐに褒めると、子供はその行動を繰り返すようになり有効である。

このように子供たちの正しい指導法を理解し、子供にも親身に寄り添えるような医師を志して努力していきたい。

【参考文献】

- 1) 柳田泰典 教育課程の活性化と教師の「ほめ方―叱り方」に関する研究